

本仏の主体性と

カントの認識論との交渉

森 川 博 祐

本仏の主体性とカントの哲学とは、史的には何等の關係交渉を持たないのであるが、思想的に見ると、或る重要な關係が生じてくると、私は思うのであります。

カントの哲学は、合理的なドイツ流の哲学と、經驗的なイギリス流の哲学を、批判し綜合したものととして哲学史上重要な地位を占めるものだということは申上げる迄もありません。そうして又、実践理性批判に於いて、キリスト教という、神の存在する合理的な証明は、不可能であるとなつた時、道德の根底として神の嚴然たる存在を明示して、キリスト教を思想的に支援したことも亦有名なことであります。即ち吾々の良心の聲は、神の声を根底として発するのである。人間の良心は、經驗によつて生じたのではなく、經驗に先き立つて存在するもので、先天的のものである。これは神を根底として生じたものであるから良心の根源として、道德の根底として、神は実在するのであると、説いて、宗教と密接な關係をもつた哲学を樹立したともい

えるのであります。

しかしカントが、哲学として、彼の独創を発表し、哲学史上重要な地位を占めるに至りましたことは、純粹理性批判、認識論に在るのであります。此の方面は、宗教とは縁が遠く、一見宗教と相反する点もあるのでありますが、私は宗學を研鑽する上に於いて、この面が、甚だ興味を引いたのであります。

彼は、吾々の認識する知性に、三つの區別を設けて、直観、悟性、理性の三段階をつけたのであります。

直観 というのは、感覺の供する材料を綜合するものと、いつて居ります。例えば、外界の出来ごとなどは、感覺によつて与えられるので、こうした材料は外から、無數に与えられるのであるが、これを綜合して自分のものとならなければ認識とはならないので、その綜合する力は、吾々感性に先驗的に有るのである。

数学は、先天的直観の學として成立するのでありますが先天的であつてしかも、客觀的妥当性を有して居る。ですから經驗した材料に當ハマリ、批判できるのである。かうした經驗的な材料と、先驗的な感性の持つ能力とが綜合されて認識が可能なのであるというのであります。能力というのが先驗的な主觀の形式であるというのであります。従

つて一般にいう、形式という意味とは全く異なるのであります。先験的なもので、主観即感性が持つ認識能力であります。カントはカテゴリと名づけて居りまして、範疇と訳されて居ります。この範疇は、感性にも悟性にもありまして、十二個挙げて居りますが、その中で、感性の中に時間空間の範疇のあることを、説いていること、悟性の中に、因果の範疇のあることを説いているのが、私が宗学でいう本仏の主体性を研鑽する上に関係交渉を持つものとして興味を感じて居るわけであります。

次に悟性のことも一寸申上げて置きますが、悟性は、直観したものゝを綜合して、吾々の経験を可能ならしめて居るものといつて、経験が法則を生むのではなく、悟性に「因果」という範疇があるから、その形式にすべての経験したことが整理せられて可能となるのである。ですから、因果という範疇は、外界の経験したことに在るのでなく、悟性が持つアプリアリである。カテゴリであるというのであります。純粹自然科学は、悟性の学であるから、客観妥当性を以て成立し得るといいます。

で、直観と、悟性の範囲では、先天的の綜合判断は以上のようにして可能だとします。

所で理性はというと、理性の力では形而上のものは認識

できない。従つて形而上学は成立しない。しかし何んだか分らないものは存在する。それを「ものそのもの」と呼んで居りますが、あるにあるが何んだか、分らないというので、認識論からでは、神は認められないのであります。

そこで話を転じますが、宗教の信仰といへば直覚的のものであり、悟りといへば、認識の世界を飛び越えた直覚を一義と致します。仏教でも、能所未分とか、父母所生以前とか、天真独露とかいふのは、一般認識の世界を超えた、直覚の世界を指すのだと思はれるが、その辺、カントの形而上学の認識不可能とは通うものがあります。

智信一如を論じ、教観雙用を主張する吾々日蓮教徒も、ヤツパリ此の辺に止つていてよいのであらうか、こゝが問題であります。

一身即三身、三身即一身、という法門がありますが、信仰によつて仏凡一体となり、そこに唯一身仏の実体を把えたとしても、更にこれを教理として三身に分析して、その特質を信解するのではなくては、解なき信と終るのではありますまいか。又幾多の仏陀觀を綜合して、三身論にまとめ教理的な認知を得たとしても、三身は即一身なりと、信仰の世界にまで打ち返されて、始めて信仰の情意的な満足というものが得られるではありませんまいか。こゝに於いて

本仏の主体性をきめる為に、法中論三、報中論三、応中論三の教理上の仏陀觀も生じて来たのだらうと存じます。

西哲の中には、不合理なる故に信ずといった人もありますが、吾々は、吾が信ずる所は、直理なりといいたいのではありません。

天台大師は、寿量品の仏を、塵点始成、五百久遠の報中論三の仏としました。遂に寿量仏の三世常住を説き得なかつたのは、諸法実相の汎心的なものを思想の根本に持ったからであります。

中古天台は、無始無終、本有無作の三身、法中論三の仏が、寿量仏だと致しました。御遺文の中にも、この思想が沢山這入って居ります。先師の教学の中にも、此の点が甚だ多くて後進の吾等が迷はされることが多くあるのであります。

カントのいった「時間」という範疇を、形而上のものに持って来て、無始無終「本有無作」という型に、嵌らねば本仏の主体性が判らないとしたから、どうしても法中論三の仏という汎神的な性格が主体となつたのであります。宗学者と哲学者とは自づから、天分が異うのでありますから絶対性を取る為に、人格性を抹殺することは愚なことゝ考へます。

日蓮大聖人は、開目鈔、本尊鈔等の標準御書に於いて、諸大乘經に一字一句もなく、法身の無始無終は説かれども、応身報身の顕本は説かれず。

即ち此の經には応身報身の顕本にあるのだといはれ、

本尊鈔に、五百塵点乃至所顯の三身にして、無始の古仏なり、

とあつて「無始の古仏」ですから、報中論三の智慧円満の仏であり、因果所成、同時具足の報中論三仏であるということ、明かであります。

信条には、

久遠本時の釈迦牟尼仏は、智慧円満の仏です。私達はこのみ仏に絶対の信を捧げます。

とあつて、本仏の主体性に太鼓の判が押されてあります。

布教とは此の信仰を説くことでなくてはなりません。

無始無終、本有無作という思性の形式によって見出されたものは、どうしても、汎神的なものとなつて、人格性を逸します。因果所成の仏といへば、人格的ではあるが、始成仏となる気がします。因も無始無終、果も無始無終としたのが顕本でありますから、思考の形式だけに囚はれて、それが信仰の対象とまで進まない人は、誠に残念と申さねばなりません。

境智、能所と対立した場合に、從の教學の中には、どうしても、境をとり、所詮所証をとって第一義としました、これは、實在論的な認識によつたのであります。此の点カントは、智あつての境であり、能証あつての所証であることを示唆してくれました。

隆尊のくり返し五百塵点劫説で、もう一つ満足が行なかつた私は、此の主客転倒した立場を教えられて、報中論三の仏が主体だとしたのが大正十三年頃に発表した「著述」であります。

觀音玄義の研究

若 杉 見 龍

觀音玄義は觀音義疏と共に性惡法門を開示せる重要な典籍であり、四明智礼は觀音玄義記四卷等を作り、性惡説を大成したのである。この觀音玄義は伝教大師の台州録に妙法蓮華經觀音品義一卷、智者大師出とあるをその初見とする。普寂は四教儀集註詮要等において、六由を挙げて、天台大師の真撰でないことを指摘してゐるのであるが、法華文句卷第十には「別有私記兩卷。略撮彼釈此題」¹とあり

文句は普門品の解釈において、先ず觀世音普門の品題を釈し、次に句々文々に及んでゐるのであり、前文は觀音玄義、後文は觀音義疏の省略なることは一読して知り得るのである。更に妙樂大師は止觀輔行卷第五の三において觀音玄義の書名を挙げるのみならず、同時に同書より引用してゐるのである。

かくて普寂の指摘せる如く、觀音玄義を偽作とする時は文句との關係においても、且つ本書が天台大師滅後あまり遠からざる時代に存在した点についてみても、改めて別な見地より検討を加える必要があるであらう。

觀音玄義を読み直ちに想到せられるのは嘉祥大師撰の法華玄論及び法華義疏である。今之らの文献と觀音玄義とを比較してみたいのであるが、最初その解釈法から検討する。

(一) 觀音の名を釈するに当り、觀音玄義（以下玄義と略称）は十義を用ひ、法華義疏は十対、玄論は二十条を挙げて釈するが、玄義と両疏を対比するに九義まで名称が一致する。

(二) 普門の普を釈するに義疏は三義を挙げて釈し、玄義は十義を用ひて釈するが、十義の中、二義はその名称が一致する。